2000. 3. 1

(Japanese Academy of Learning Disabilities)

JALD 日本LD学会会報 第32号

事務局：栃木県カウンセリングセンター内
〒320-0851 宇都宮市鶴田町687-9ムギショウビル2F TEL.028-647-1717 FAX.649-1213
URL. http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jald/

LD児のよさを引き出す教育とは

都立多摩教育研究所
水野　薫

何人かのＬＤ児を知的障害の心身障害学級や養護学校へ送った。通級による指導を受けていた子も移って行った。通常の学級で行きづまってしまったため、あるいは進める高校や専門学校が無かったために。

東京の品川区で小学校を保護者や子供が選べるようになり、新しい時代に合った高校が模索され、大学の在り方も変わってくる。教育が大きく変わろうとしているのだろうか。新学習指導要領では、より個に応じた多様な教育を提唱しているようにもみえる。しかし、これで果たしてＬＤ児たちは救われるのだろうか。

人が充実した人生を送っていくために必要なものは、その人なりの職業自立と人とのつながりと余暇活用能力だと考えている。この視点から、ＬＤの青年・成人が充実した人生を送れるための教育を考えてみる必要がある。

現在の学校教育の大半は、たてまえは何であろうと究極のところ、学習指導要領で示された内容を習得させることに重きがおかれている。私はこれにとらわれない思い切った教育が、ＬＤ児のためにあってもいいと考えている。授業の大半を、鉄道模型作りや魚つりやバンド演奏など、趣味や余暇を楽しむための活動とロールプレイングやディベートなどを通した障害理解やソーシャルスキルトレーニングと、職業準備教育としての労働に費やす高校があってもいいだろう。授業は個々のニーズに応じて「旅行」とか「家事」とか「経済」などのテーマで、教科枠を越えて生活スキルと結びつけて展開させる。教師は教える人から支援者となり、時にはファシリテーターでありカウンセラーである。

これらの活動を通して子ども達は「障害の受容」を果たす。そしてその中から素晴らしい自分を発見し、一方で、必要な援助を適切に求める力を手に入れている。また、仕事と生きがいと友だちづきあいのスキルや態度を体得していく。

私は学習指導要領を否定するのでもないし、教科学習が必要ないと言っているのでもない。ＬＤ児たちにとっての「生きる力」を考えたとき、現在の学校教育の枠を根底から見直すことが求められているのではないかと考えているのである。